

Yakov M. Rabkin,
*A Threat from Within: A Century of Jewish
Opposition to Zionism* (Translation from French by Fred A. Reed with
Yakov M. Rabkin) Zed Books, 2006. pp.ix+261, \$34.95

青木 良華

本書は、2004年にフランス語で出版された*Au nom de la Torah: Une histoire de l'opposition juive au sionisme*, *Les Presses de l'Université Laval*の英訳版である。2010年には日本語訳(『トーラーの名において シオニズムに対するユダヤ教の抵抗の歴史』菅野賢治訳, 平凡社)も出版され、他にもロシア語, アラビア語, スペイン語, イタリア語, オランダ語, ポーランド語などにも翻訳されており, 本書のテーマが国際的に関心を集めていることが分かる。英訳に著者自身が携わっていることから, 著者の意図がより忠実に反映されているのではないかと判断し, 本稿では英訳版を取り上げることにした。

著者ヤコブ・M・ラブキンは、1945年に旧ソ連レニングラードに生まれた敬虔なユダヤ教徒であり、現在はカナダ、ケベック州モンレアル大学で歴史学を講じており、ロシア史、ユダヤ史を専門とする。2008-10年には三度日本に滞在し、東京大学や同志社大学、明治大学などでシンポジウムや公開講座を精力的にこなしている。

本書において著者は、「シオニズム・イスラエル国家＝ユダヤ教」という世界的に広まってしまったステレオタイプに疑義を呈することを狙いとし、シオニズムと伝統的なユダヤ教の考え方の対立を、メシアニズムや武力行使、ショアーの解釈など様々なテーマの下に論じている。著者は、「この2世紀の間におけるユダヤ人の生活に特徴的な見解と立場の多様性がユダヤ教とシオニズムの間を区別するのに役立つ」(P.4)と述べているが、本書全体を通じて伝統的なユダヤ教の多様な考え方の根底にはトーラーへの忠誠という大きな共通点があるということも強く主張されているように思われる。

本書の構成は以下の通りである。

Prologue

1. Orientations
2. A New Identity
3. The Land of Israel: Exile and Return
4. The Use of Force
5. Collaboration and Its Limits

6. Zionism, the Shoah and the State of Israel

7. Prophecies of Destruction and Strategies for Survival

Epilogue

Afterword

Acknowledgements

以下、各章の内容を紹介し、本書の有する意義を考察してみたい。

序文において著者は、イスラエル―パレスチナ紛争がディアスポラのユダヤ人への攻撃の引き金となっているという事実から、ユダヤ人とイスラエル国家を結びつけて考えることが常態になってしまっていることに対して疑問を提示する。シオニストの間ですらこのような考え方が定着しているが、その一方でハレーディのユダヤ教徒たちの間ではトーラーの名において、そしてユダヤ教の伝統の名においてシオニズムは拒絶される。彼らにとってシオニズムとは、ユダヤ教の魂に内部からの腐敗をもたらしたもの、ユダヤ・アイデンティティをトーラーへの信仰から世俗的なものへ変化させてしまったもの、ユダヤ教の伝統を否定する脅威となるものであった。著者はこうしたトーラーへの献身という視点からなされるシオニズムへの抵抗の歴史を描くことを主眼とする。ハシディームやミトナグディーム、改革派や近代正統派など様々な立場のユダヤ人が含まれるが、シオニズムとイスラエルを評価するにあたってトーラーの戒律と価値を中心に据える点では彼らは共通している。また彼らは、イスラエル国家は「シオニスト国家」であって「ユダヤ人の国家 (Jewish State)」ではないと主張することで、ユダヤ教の伝統に照らせばシオニズムやイスラエルはユダヤ的なものとは言えないのではないかと絶えず問いを発している。

第一章ではシオニズムの歴史を概観し、宗教的なシオニズム批判の基本的な考え方を述べている。シオニズムは19世紀末の中欧において、同化ユダヤ人の中で興った思想であった。彼らはもはやトーラーの戒律を遵守せず、ユダヤ教の規範的な側面をほとんど知らない人々であった。よってシオニズムは世俗化 (secularization) の潮流から生まれてきたと言える。これはユダヤ教においてはトーラーの軛からの解放を意味していた。シオニズムが集団としての運動に発展したのは、ユダヤ人が社会的・政治的に不利な立場に置かれていたロシアにおいてであり、ロシアからのユダヤ移民がシオニストの行動主義の核を形成することになる。こうしたシオニストの間では、イスラエル建国を不可避のものとする目的論的 (teleological) な歴史記述が幅を利かせているが、これは離散 (exile) という悲劇を含めてユダヤ人の身に起こった全てのことはユダヤ人自身の行為にその責任があり、そのため悔い改めの必要があると考えるユダヤ教の伝統的な感性とは対立するものであった。しかし伝統に基づいてラビたちからなされる批判は、イスラエル史においてほとんど言及されることはなく、さらにシオニズムの諸組織が大きな力をもつ今日では、シオニズムに反対の意を表明することは不可能に見える。

また著者は、シオニストのイデオロギーと実践がユダヤ教の根幹に反すると考える反シオニスト (anti-Zionist) と、シオニズムをユダヤ教の伝統とは異質なものとしながらも政治的構造としてイスラエル国家を容認する非シオニスト (non-Zionist) を分けているが、両者ともユダヤ・ナショナリズムと、それを神の贖いに関連づけることを否定することに関しては一致していると考えられる。「シャス」の運動やルバヴィチ派、サトマール派など非シオニストの間ではアプローチや

意見の違いはあるが、離散の中に生きているという自覚は共有されており、これをユダヤ人によるトーラーからの離反に対する神の罰と捉え、シオニズムを人間の手によって聖地を獲得しようとする異端として批判する。著者はそれぞれの宗教的信念に基づいてシオニズムを批判する人々の間でのユダヤ教の幅広い潮流を見ることで、トーラーの名においてなされるシオニズムの拒絶の広がりや起源を理解しようと試みている。

第二章では、シオニズムがどのようにユダヤ人のアイデンティティを変化させたかが述べられている。解放によってユダヤ人が周囲の社会に溶け込んでいった西欧の実情に触発され、シオニズムの理論家アハド・ハ＝アムは、ユダヤ教がユダヤの民族的アイデンティティの一つの選択的な側面にすぎないと主張した。この考えが同化の進展が緩やかであったロシアに持ち込まれたことで、「非宗教的ユダヤ人 (secular Jew)」という新しい概念が生まれた。これはユダヤ・アイデンティティから宗教的・規範的な特質を取り除き、生物学的・文化的な特質のみを保持しようとするものであった。この観点からするとシオニズムと人種主義的反ユダヤ主義との間に利害の一致を見ることすらできる。

このようにユダヤ・アイデンティティの中で民族的な側面だけを強調し、またそのためにユダヤ教から借りてきた宗教的な象徴を政治的な領域に移すことでユダヤ教を聖地獲得の正当化のために利用するシオニズムに対して、いずれかの民族集団への帰属や所与の領土ではなく、トーラーへの忠誠に民族概念を基礎づけるラビたちはもちろん異議を唱えた。メシア待望の熱狂に対する自重を促すラビたちにとって、政治的な贖いを求めるシオニズムは幻滅をもたらすものとして警戒され、またそれによって生み出される新しいイスラエル・アイデンティティはユダヤの伝統からの断絶を意味していた。

民族と宗教が深い関わりをもっていたユダヤ・アイデンティティから宗教を剥ぎ取ってしまったことにより、シオニズムは民と神の間に鉄の柵を設けて大衆がトーラーに回帰することを不可能にしてしまった。こうしてイスラエルにおいてなおアイデンティティの危機の状態に置かれる人々が存在することになる。このような非宗教的なアイデンティティの構築には、伝統的なユダヤ教の概念に世俗化された意味を付与する現代ヘブライ語の構築も重要性を発揮している。

第三章では、メシアニズムとイスラエルの地に関するユダヤ教の伝統的な見方とシオニストの見方を比較している。伝統的な考え方においては、イスラエルの地への移民は軍事力や外交によってではなく、人間の善行の普遍的な結果によってメシアが到来することによってのみもたらされるものであったが、神の業であるメシアの到来を早めることに対する警告はユダヤ史上ずっとなされてきた。タルムードには集団としての聖地への移住を禁じる誓いが記されており、政治的手段によるイスラエルの地への帰還というシオニズム的な考えが、ユダヤ教の伝統における救済の考えとは相容れないものであることが分かる。

伝統的な見方では、不信心者による物理的な聖地の再建は、過去の二度の離散よりも過酷な離散をイスラエルの民全体に与えると考えられており、そのため聖地を軍事的に征服し、そこにユダヤ人を集めるといったシオニズムの企図は、冒瀆の行為であるとともにユダヤ人全体にとって危険なものであった。贖いへの信仰がメシア到来以前の時代においてユダヤ人の生活の本質的な特徴の一つであり、聖地への帰還はあくまでも精神的な努力によって達成される。たとえユダヤ教の祈禱の中に聖地への帰還への願いが多く含まれていたとしても、それは意識や感情、文学の領

域に留まり、決して現実に具体化されるわけではない。伝統的なユダヤ教はこうした逆説性をはらんでいる。

こうした両者の見解の違いはイスラエルの地に対する愛という点においても表れている。伝統的なユダヤ教におけるイスラエルへの愛は、神への愛とトーラーへの愛と結びつくものだが、シオニズムにおけるイスラエルへの愛は政治的、イデオロギー的な形を取り、さらにパレスチナにおけるアラブ人の存在を認めない排他的なものであった。こうした攻撃的、排他的なシオニズムが周囲の民からの敵意を呼ぶとして批判するラビもいる。物質的な聖地の再建は必然的に精神の墮落と破壊をもたらすと考えるラビたちにとって、精神的にも身体的にもユダヤ人への危害を引き起こすシオニズムは、ハスカラよりもユダヤ教の根底を掘り崩すものとして批判されるのである。

第四章では、ユダヤ教における武力行使の正当性に関する考え方と、イスラエルの地におけるシオニズムの思想や実践が比較されている。多くのユダヤ教の立場からの反シオニストたちが逆効果しか生まないとしてあらゆる攻撃的な行動を避けるよう主張していたのに対し、非宗教的なユダヤ人たちはこの謙遜や忍耐の姿勢を恥とみなし、運命を自分たちの手で変えようとする方向へ駆り立てられた。ユダヤ人の特質は慎ましき、慈悲深さであり、常に平和を追い求めるべきであるとする伝統的なユダヤ教の価値観とは逆に、シオニズムは軍事的英雄主義に訴える。著者はこうした武力行使を正当化するシオニズムの思想的淵源を、規制や迫害に対して苛立ちと憤激を感じていたロシア・ユダヤ人の急進性^{ただ}に見出す。さらにショアの解釈によって「義しい犠牲者 (just victim)」という自己イメージが生まれ、彼らの不満の感情は自衛の必要性の主張と結びつき、英雄的なロマン主義がユダヤ人の間に定着してしまった。この観点から、抑圧者への抵抗と同時に伝統的なユダヤ教への抵抗も要求される。シオニズムは屈辱の感情、個人や集団としての誇りを得たいという感情から生まれてきたと著者は考えている。

20世紀後半におけるイスラエルの軍事的勝利に関しても異なった解釈がなされる。宗教=民族派はそれを奇跡や神の慈悲心の表れとみなすのに対し、反シオニストのハレーディたちはサタン^のの仕業とみなす。ハレーディにとって神が偶像崇拜者(=シオニスト)を助けるということは考えられないことであり、軍事的勝利は、シオニズムの台頭に始まりショアを経て不可避の墮落に至る破壊のプロセスにすぎず、よって彼らはイスラエル国家をユダヤ人にとっての深刻な脅威とみなす。

こうした考えから、反シオニストのラビたちはイスラエルの軍事行動から、ユダヤ教、そしてユダヤ人一般を分離しようと努力し、パレスチナ人との和解やイスラエルの軍事活動への非難のメッセージを伝えてきた。彼らにしてみれば周囲の諸民族を無用に挑発しているのはシオニストとイスラエル国家なのであり、パレスチナ人によるテロリズムもシオニストによるトーラーからの離反に対して与えられた罰と考えられるのである。

第五章では、シオニスト組織と協力すること、そして国家を認めることは許されるのか、という問題をめぐって様々な立場からなされた主張を分析している。アラブ人が主に政治的な理由でシオニズムに反対したのに対し、ハレーディたちはシオニストの世俗主義ゆえに反対していた。つまり彼らのシオニズム、イスラエル国家の拒絶は深くユダヤ教に根ざしたものであった。シオニストとの協調に対する反対の姿勢は、特に20世紀への転換期のドイツにおいて強く見られ、正

統派も改革派もお互いの差異を封印し、一致してシオニズムへの異議を表明していた。

しかしイスラエルの地に住む大部分のハレーディは、シオニズムに対して反対するか無関心を貫く一方で、イスラエル建国宣言後はその態度を和らげるようになった。イデオロギーとしての国家を避けることは容易でも、現存する国家を避けることは困難であった。経済的に弱い立場ゆえに国家から補助金を受け取っている彼らは、「国家を事後的 (be-di-avad) に受け入れる」、「義父モデル (father-in-law model)」などのユダヤ法や伝統の概念を使って自分たちの国家に対する関係を正当化していた。

このようにイスラエル国家を認めるハレーディの政党「アグダット・イスラエル」の支持者と、サトマール派やルバヴィチ派のハレーディたちの間には根本的な不一致があるが、国家にユダヤ教的な正統性を与えることを拒む点では一致している。イスラエル国家に聖書の歴史に由来する特徴を認めない彼らにとって、自分たちは未だ離散の境遇に置かれているのであり、しかも「不信心者ども」に囲まれ、「尊大な罪人ども」に指導されているイスラエルに住むことは二重の離散 (double exile) を意味しており、ハレーディたちはイスラエルの地にいながら深い疎外感を感じているのである。こうしてユダヤ教からの離反を促進する要素をシオニズムに見て取った敬虔なユダヤ人の多くが、ユダヤの民の前衛を自称するシオニズムに対して危機感や嫌悪感を覚えて抵抗することは、ごく自然なことであったと言える。

第六章では、ショアーの位置づけをめぐって、シオニストのイデオロギーと著名なラビたちがそこから引き出した教訓とを比較している。圧倒的多数のシオニストにとって、ショアーはディアスポラの全てのユダヤ人にとっての脅威を示す究極的な証拠であり、それゆえイスラエル建国とその軍事的指導権を正当化するための切り札であった。それに対し神の摂理のみが大惨事を説明しようと考える敬虔なユダヤ教徒にとって、ショアーの悲劇は自分たちの行動についての内省、悔い改めを要求するものであった。特にリトアニア派ユダヤ教の一大権威であるラビ、ヴァセルマンは、ナチスによる迫害はシオニズムの直接的な結果であるとして、ショアーはシオニストによって推進されたトーラーの廃棄に対する罰に他ならないと考えていた。

さらにラビたちはシオニストの運動がショアーに対して負っている歴史的責任についても批判する。シオニズムは迫害されたユダヤ人を救う計画であることを主張する一方で、何よりも民族自決のためのイデオロギー的運動であった。この両義性のゆえに、シオニズムはナチズムとの協調関係を築いたり、パレスチナ以外の地へユダヤ人を受け入れようとする努力を妨害したりしていた。こうした絶滅収容所のユダヤ人の運命よりも将来の国家建設により関心を示していたシオニストの指導者層に対して、ラビたちからも歴史家たちからも非難が向けられる。

シオニストによるショアーの記憶のイデオロギー的、政治的な濫用によってイスラエルの同盟国からさえも反感を買うのではないかという懸念もある一方、ヴァセルマンは、トーラーに関する無知と信仰の消滅によって、逆境を解釈する伝統的な枠組みが喪失したことが非宗教的なユダヤ人たちを無力にし、暴力へと駆り立てていると嘆く。

第七章では、公の議論におけるユダヤ教の立場からの反シオニストの主張とその影響力について述べられている。近年中東においてイスラエル国家が現在の姿のまま存続することに対して疑念が広まる中、ユダヤ教的反シオニストたちは公の議論において、ユダヤ人が皆シオニストではないこと、彼らがイスラエル国家や、ユダヤ人の名において国家が行う活動に自己を同一化して

いるわけではないことを主張している。彼らのシオニズム批判に対して西欧のメディアは目を向けつつあるが、トーラーに焦点を当てた反シオニストの議論は、イスラエルにおいてもディアスポラにおいても必ずしも注目されるわけではない。それどころかシオニストたちは、厳格にユダヤ教を実践し続けているハレーディに対しては「非ユダヤ的」というレッテルを貼ることができないため、ユダヤ教の権威に基づくシオニズム批判に対しては過敏に反応する。よって反シオニストのハレーディたちは「ユダヤの民の裏切り者」とされ、彼らの議論はシオニストの知識人には全く認知されないのだ。

しかしパレスチナとの紛争という現実から、人権への関心や国家への失望が高まり、ユダヤ教を實踐していない多くのユダヤ人も、伝統的なユダヤ教の平和主義や政治的現実主義といった価値観に目を向けるようになってきている。こうした人々に反シオニストの古典的なメッセージは届きうるのではないかと著者は考えている。

以上が本書の概要である。本書ではユダヤ教の立場からの、「トーラーの名において」なされるシオニズムに対する一貫した粘り強い抵抗に焦点が当てられていた。シオニズムやイスラエル国家への批判がタブーとされている風潮の中で、シオニストから「裏切り者」と呼ばれながらもあえてシオニズムへの抵抗を示す敬虔なユダヤ教徒たちは、ユダヤの民の危機を防ぐために、人々に誤解され迫害されながらも当時の政治の指導者に異を唱えた、イザヤやエレミアなどの預言者の系譜に位置していると言えるだろう。

しかし敬虔なユダヤ教徒たちが、シオニズムはユダヤの連続性における断絶であり、人為的にメシアの到来を早める神への冒瀆であってユダヤの民全体に危機と破壊をもたらすと考えてその批判の姿勢を強固で徹底したものにする一方で、第七章で見たように、シオニストの側もユダヤ教の伝統がもつ権威ゆえに、またイスラエル国家の将来への不安感ゆえに伝統的なユダヤ教からなされる批判に対しては過敏に反応し、そうした批判への動きに圧力をかける。このようにお互いに「内部からの脅威」を感じているがゆえに、両者を隔てる溝はますます広がってしまっているように思われる。著者はこの両者の溝を埋めるもの、またアラブとの間の平和に通ずる回路を、平和と慎ましさ、精神的な努力の重要性を教えているトーラーとその普遍的な諸価値への回帰に見出していると言える。

本書においては「ユダヤ教的反シオニスト対シオニスト」の構図が一貫して示され、またその対立をめぐるテーマの多様性なるものもよく理解できたが、評者としては「ディアスポラの多様性」ということにももう少し焦点を当てて欲しかった。同じディアスポラでも、ショアーやボグロムを体験しなかったイギリスやアメリカのユダヤ人と、その体験の記憶が生々しく残るドイツや東欧諸国のユダヤ人、またシオニズム以前からアラブ諸国に住み、周囲のアラブの人々と友好的関係を築いていたユダヤ人とはシオニズムに対して抱く感情も様々に異なるだろう。もちろん具体例は多く散見されたのだが、このディアスポラの反応のグラデーションを、その地域のもつ歴史の経緯も併せて体系的に論じる箇所があれば、より理解が深まるように感じた。

本書はユダヤ教の内部からシオニズムを批判するという大変野心的な著作であると言える。著者の「伝統的なユダヤ教とイスラエル国家を区別する」という主張は、世界の多くの人にとっては意外なものと思えるのではないだろうか。日本においても「ユダヤ＝イスラエル」という観念連合は

ごく普通の発想であるように思う。こうした固定観念に対して、著者の主張するテーゼはユダヤ教をユダヤ民族主義との混同という誤解から救い出すものであると評価できる。しかし皮肉にも、もともとヨーロッパの民族主義から影響を受けて始まった世俗主義的な運動であったシオニズムが、逆に20世紀後半からユダヤ教との関わりをより一層強め、「イスラエルは神の国であってパレスチナ人の統治は認められない」という原理主義的な考えを現在もなお主張している。こうした現在の風潮において、著者の主張がどの程度妥当性を発揮できるかは慎重に検討されなければならないだろう。またそれは、公論の場でハレーディ系の反シオニストがどれだけ自分たちの主張の影響力を拡大できるか、ということにもかかっているのではないだろうか。

もう一つ問題点をあげるとすれば、ユダヤ教内部からの批判であるためか、「シオニズム=悪」という印象が強すぎるように感じる。シオニズムの根源には、ポグロムやナチズムといった反セム主義(反ユダヤ主義)があり、またイギリスやアメリカなどの大国がこの植民運動の強力なパトロンとなっていたことを忘れてはならない。著者もこの点を指摘してはいるが、こうした欧米社会の抱える歴史的な問題にも、シオニズムと同様に批判の目を向けることが不可欠であると思う。

しかしこうした問題点があったにせよ、それで本書の意義が損なわれることにはならないだろう。シオニズムの問題、中東和平の問題だけでなく、「平和」をどのように構築するのかという普遍的な問題に対しても、著者の主張する伝統的なユダヤ教の価値観は重要な視点を提示していると言える。